

蜻蛉日記の本質と展開

坂口 由美子

(序)

秋山虔氏は、日記文学は根元的には虚構であるとされ、

実人生の経験とは別個にそれ自体が自立的に展開する論理を内包する世界。そのような世界を造り成す営為がやはり実人生経験と不可分の関係にあることはいうまでもないのであるが、それはその実人生の事実^(注1)に立脚し、その事実を素材としてあれこれと取捨し脚色するという単純な意味では必ずしもない。そうでなくて、実人生経験からの切実な要請として、実人生と異次元に、そこに当人が生きる場としての言葉の秩序の世界^(注2)作品を造立するということである。

と述べられている。本稿ではこの秋山氏の論に従い、作者道綱母と「蜻蛉日記の登場人物道綱母」とは、不可分ではあるがイコールではないという視点に立ち、作者が実人生からの要請によって、素材としての実人生に、執筆時においていかなる文学的操作を加えて、それを乗り越え、かつ、いかにして明確な主題を終始維持してこの作品を形象化したかという創造の過程を考えていきたい。

また、この作品は一見してわかるように、上、中、下巻の性格が

かなり異なっているが、このような区別について特に注意したい点は、それぞれの巻がそれぞれの特徴を持つといっても、自ら繫っていく中で、上巻的なもの、中巻的なもの、下巻的なものが入り混じりながら展開し、前のものを残しつつ新しいものへと変質していくことである。その移り行きに注目しながら、この作品の本質をみていきたい。

(一) 人物造型

1) 父・母

この問題を考えていく一つの要素として、人物造型について考えてみたい。

まず父倫寧であるが、直接登場するのは全体を通じて七ヶ所にすぎないが、そのどれもが作者の生涯の転機ともいうべき重大な事件にかかわっている。

まず、上巻天曆八年十月の離京の段については、その構成を伊牟田経久氏が分析されている。氏は、作者が結婚後日も浅く夫を心から信頼しえないという条件下での、父との別れを悲嘆するという表現になっており、父との別れそのものを悲嘆するのではない。結婚

早々の身のはかなさを描くという日記執筆時の、基調を効果的に盛り上げる一つの要素とされた。^(注2)これはまさにその通りであって、まだ新婚二カ月しかたっていない頃で、記事を見る限りでは、作者が兼家をほとんど独占していた親さえあり、作者が不安に思う必然的理由、具体的な場面は何一つみつからない。つまりこの段における父の役割というのは、必然性、具体性のない兼家の「頼もしげなさ」を、その「頼もしさ」と対比させることによって、必然性、具体性のあるものとし、作者のものはない境遇を浮き彫りにすることであった。しかも、その「頼もしさ」は、作者から失なわれるという形において描かれているわけである。対応する帰京の記事がないのも、これを裏付けよう。

このような頼もしき人としての父を描く場面はその後も続く。母の死に際しても、作者を救い慰める直接の行為をしたのは兼家ではなく父であり、鳴滝籠りの時二度出るのも同様である。特に、下山の日の兼家来訪の直前には、任国からたつた今上京した、その足でやって来た父が作者を説得する。作者は「いと力なく思ひわづらう。」「日本古典文学全集」『蜻蛉日記全注釈』^(注4)に指摘されているように、父の来訪も、実際には兼家の要請に基づくものであるが、作品世界ではあくまでも、「頼もしき人」父の勧告で下山を決意した所で、「頼もしげなき」兼家が強引に京へ連れ戻したと描かれている所に注目したい。

再度の初頼詣の生き生きとした自然描写も、兼家との緊張関係から解放されて、父と同行したという安心感から来るものなのであろう。また下巻天延元年八月、広幡中川への転居を定めたのも父である。今の住居を人手に渡して自分の家に住ませようと、「わが頼

む人さだめて、今日明日、広幡中川のほどに渡りぬべし」^(注5)これ以下の文脈は複雑で解釈にも諸説はあるが、仮りに「蜻蛉日記注解94」^(注5)説に従うと、転居の予定は、兼家に前もってほめかしたところが、——（引越の日）父が「今日移転するお知らせをしなくては」と、兼家公に御報告すべき旨を注意してくれたけれども——かれは「物忌みがあつてうかがえません」といって、平然としているので、その日も私は「なに、知らせなくてもかまうものか」と思い、黙って引越した、となる。このように実際には、倫寧は父親として当然、娘とその夫との間に立って、常識的な線でどうにか丸く収めるといった役割を務めてきたのであろうが、作品世界では、父は夫と作者との間に立つ人としては描かれていない。例えばこの記事にしても、兼家の訪れが絶え、家も荒れ果ててしまったので、父が作者を自分の家に住ませようとした、という所の方に比重が置かれている。

つまり父倫寧は、作者を中心として夫兼家とは反対側に立つ人、「頼もしげなき」夫に対する「頼もしき人」として描かれている。常に作者を裏側から支え、ある時は一体となって、頼もしげなき兼家に対する人としての倫寧の存在は、記事として表面に出てくる箇所は少なくても、この床離れに至る迄の、作者と兼家との関係を描く記事の裏側に、大きく感じられるのである。

ところが、この転居の記事を境に、記事の裏側にある、抛り所としての倫寧の存在感は次第に薄れていく。下巻天延二年十月、作者に兼通から思いがけない懸想文が届いた時の父は、もはや「古めかしき人」——ただの常識人——としてしか描かれていない。

また、下巻天延二年十一月の賀茂の臨時の祭の記事では、酒盃を

さされたりして兼家のひきたてを受ける父の姿が、やはり古めかしき人として、客観的に描写されている。老いたる父の姿、そこにはもはや、兼家に対する人として、大きく頼り甲斐のある存在として造型された父の面影はない。

次に母について考えてみたい。母は上巻に四回登場しており、そのうち三回は「古代なる人」として作者と兼家との間に立って、その關係を和らげる役割を持っている。しかし、その存在が重要な意味を持つのは、最後の母の死の段である。この記事で注目しなければならぬのは、作者の悲嘆の原因が、母が死の直前まで作者のものではない身の上を案じていたという所にあることである。そしてこの段の構成は、これを裏付け盛り上げていく。

まず冒頭の総括提示には「さいふいふも、女親といふ人あるかぎりはあるけるを」とあり、母親が生きているということ、兼家とのものはかない夫婦生活を何とか支えていくものとして捉えているわけである。続いて、作者までも病気になるってしまい、「さらにせむかたなくわびしきことの、世の常の人にはまさりたり」とある。確かに作者の病気の描写からわかる悲嘆の深さは、世間の人の比ではない。「世間の人は、母に先立たれても父親や夫が身近にいるけれども、作者の場合は、父は『県ありき』で常に他国にいるし、(応和三年以来河内守)、兼家はもうひとつ信頼できないので、母を失なった悲しさは人一倍だという気持」「全注釈」というわけであるが、何はともあれ、兼家との夫婦仲がものほかないことが、作者の「わびしさ」の「世の常の人にはまさる」原因なのである。

もちろん兼家が作者の母の死を悼んでいないわけではない。四十九日も過ぎて、「人はかう心細げなるを思ひて、ありしよりはしげ

う通ふ」とある。この部分について「注解20」は、「兼家は彼女の不幸を、ただ現象的にいたわる以上に、一步も出ようとはしないのである」とし、「兼家に関する言葉は、いずれも彼の作者に対する行動としてのいたわりを述べながら、その裏に、彼女の内なる悲しみをともに傾ちえぬ男の愛情の限界を知ったわびしさを、ひそかに揺曳させている」と解釈している。作品世界における解釈はこの通りだと思われるが、これを康保元年当時の作者の心境とすることは無理がある。当時、作者は兼家の愛情の表現として、現象的にいたわる以上のものを求めてはいないように思う。だから、この段における兼家に関する表現にも、男の愛情の限界を知らずにはおれなかつた執筆時における心境が、色濃く映っていると考えられる。

一方、肉親達は作者と悲しみを共有する存在として描かれている。作者を介抱した父、「みみらくの鳥」の歌を交わす兄、伯牙絶絃の故事を踏まえて琴の歌を交わす叔母、これらの人々が兼家に対する作者側の存在として描かれているのである。

以上のように、この母の死の段は、執筆時の心境に基づく文学的操作によって、死の直前まで作者のものほかない身の上を案じていた母が亡くなってしまったこと、それに起因する作者の悲嘆を共有するのは肉親であつて兼家ではなかつたという、二重の効果を上げているのだと思う。このように母は死によって作品の主題に即した深い存在を持ち得た人物である。ここで母の死を媒介として兼家との夫婦関係の頼りなさが映し出されるという所には、中巻の世界では作者自身の死に目が向けられていることなどを考え合わせると、やはり上巻的なものが感じとれるであらう。

(2) 道綱・兼家

まず道綱について考えてみたい。道綱が生まれたのは天曆九年八月である。作者はそれを冷淡ともいうべき筆致で簡単に記す。この上ない喜びであるはずの、初めての子供の誕生の有様は一切語られず、代わりに、兼家の心遣いにさすがに心がこもっていたとことだけが語られる。上、中巻の世界における道綱像の、作者と兼家との間に立つ人としての造型は、その誕生の時からはっきりとしていたといえよう。道綱に対しては、「幼き人」「大夫」「助」と呼び方が変わるが、それがそのまま、道綱像の造型の転機になっているのである。

まず、上巻の世界における道綱は、まだ幼く、作者と兼家とのほかない夫婦仲を、幼い行動を通して印象的に描き出している。町小路女が零落したにもかかわらず、いつもの程度に時たま通ってくるようなので、ともすれば不満に思うことが多かった頃、兼家の「いま来むよ」という言葉をまねびありく姿が描かれ、泔水の水の段では、作者と兼家が些細な事言い争った挙句、出て行きざまに兼家が、「幼き人を呼び出でて、『われはいまは来じとす』」などと言ひおきて、出でにけるすなはち、はひ入りて、おどろおどろしく泣く。」とある。

中巻の世界においては、道綱は頻繁に、父母の間を使者として往復しており、これは上巻的道綱像の成長した姿といえよう。

安和二年病氣した作者の遺書の中で道綱に対する愛情と執着が切々と語られるのも、「注解^(注7)36」にいうとおり、作者の道綱との繋がりは兼家への執着と不可分の関係にあると理解できると思う。

やがて内裏の賭弓のことがあって、道綱も出場し活躍するが、そのこと自体に対する嬉しさもさることながら、それに対する兼家の

心遣いに対して、「常はゆかぬこちも、あはれに嬉しうおぼゆることかぎりなし」といった感慨が述べられている。それだけ道綱の仲立ちとしての役割の大きさが感じられるが、そこには道綱自身の心の動きはない。しかし、道綱が鷹を放つ段では、後に述べるが、初めて道綱の具体的心情の現われた姿が描かれており、固有名、具体的道綱像の進展が見られる。

相撲の節会、道綱叙爵の記事では、兼家に相手にされず、一人しよんぼりと退出してくる道綱の姿を描くが、独立していく道綱像に重ねてなお、道綱に対する兼家の心遣いを、作者に対する愛情の尺度にしていくこれ迄の道綱の描き方が作用しているといえる。

記事の内容から判断すると、兼家の道綱に対する心遣いには並々ならぬものが感じられるし、実際に、兼家と道綱との親子関係そのものが、作者のいうように、作者と兼家との夫婦関係の良し悪しによって、左右されたかどうかは疑問である。しかし「幼き人」道綱は、作者と兼家との夫婦関係と切り離しては語られていない。このことは、作者の道綱への母性が薄いなどと解釈すべきではなく、あくまでも作品世界では、まず、道綱像は父母の間に立つ人として造型され、主題を支えているのだと思われる。

鳴滝籠りでも、同伴した道綱が、迎えに来た兼家と、下山を拒む作者との間の段階を行ったり来たりするが、その姿は道綱像の象徴といえる。しかし、最後に道綱は、「御送りせむ。御車のしりにてまからむ。さらにまたはまうで来じ」と言って泣く泣く出て行くので、作者は「これを頼もし人にてあるに、いみじうも言うかなと思」って、かなりの衝撃を受ける。その姿に道綱の成長を感じた作者は、彼を「大夫」と呼ぶようになる。道綱が、端の方に出て坐

り、物思いにふけっている作者に、「入りね入りね」という、鷹を放つ場面に類似した母子抒情の場面では、再び「幼き人」と呼ばれるが、これを最後に、「大夫」と呼ばれるようになり、それから、父母の間に立って主題を支える人としての性格は弱くなって、道綱の目から見た兼家像も描かれるようになる。

下巻、兼家が太納言になった時、

わがためには、ましてところせきにこそあらめと思へば、御よろこびなど、言ひおこする人も、かへりては弄ずることちして、ゆめ嬉しからず。大夫ばかりぞ、えもいはず、下には思ふべかめる。

そうは言うもののやはり嬉しい作者の気持を、道綱の様子にこめられていると思われるが、表現方法として、道綱を今迄のように作者の分身として兼家に繋がる存在とせず、作者とは別に、父と子として繋がっているということが書かれている所に注目したい。また、作者邸を出発しようとする父兼家に片膝ついて太刀を差し出す道綱の姿も印象的である。

さらに下巻の特色が著しくなってくると、夢占の段で道綱の将来についての期待が語られるが、ここで初めて兼家との繋がりとはい切り離して道綱本人について語られ、作者不在の時の隣家の火事の記事では、道綱が万事きちんととりしきっていたことが、誇らしげに語られる。

このように、道綱の成長につれて、「父母の間に立つ人」としての性格は次第に薄れていく。やがて道綱と大和女との恋愛交渉が始まる。

次に兼家像を考えてみたいが、これは作品全体にかかわって

て、これを取りあげることはずなわち、作品世界そのものを取り上げることに他ならない。その全体像は後章の作品の分析においておのずから明らかになれるであろう。ここではただ、人物造型の方法における変化を見る一つの目安として、兼家像における公的な面、権門に生まれ、政治的手腕を存分に發揮して位を登りつめていく姿を描いた記事を取り上げてみたい。

これには二種類あり、その第一は兼家の昇進を描いた記事である。作者の兼家昇進に対する気持は常に変わらず、一面ではそれを喜びながらも、次第に華やかな別次元の人間としての隔たりを強くしていく。それにつれて作者は公の兼家像を、あたかも物語の登場人物でもあるかのように、客観的に見ることによって、生き生きと描くようになる。これが兼家像の造型における第二である。

上巻康保四年六月、村上天皇崩御によって、兼家は藏人頭に任せられる。作者はお祝を言ってくる人々の相手をして、「すこし人こちすれど、わたくしの心はなほおなじごとあれど、ひきかへたるやうに騒がしくなどあり。」といった状態である。ここでいう「わたくしの心」とは、「いわば兼家の妻としての公的な生活意識と、必ずしも相容れない、より私的な女心」(注27)つまり「兼家の途絶えを恨む満たされない心」(注28)「日本古典文学大系」(注29)と見るのが通説であり、兼家昇進の喜びと交錯しつつ、私的に満たされない心を一層強調する意味において、この記事は主題の中に組み込まれている。

中巻天禄元年八月五日、兼家右大将となる。

五日の日は司召とて、大将になど、いとどさかえまさりて、いともめでたし。それより後ぞ、すこししばしば見えたる。

「めでたし」「見えたる」という筆致は、第三者的であり、皮肉にさえ感じられる。

続いて十月、大嘗会の御禊見物に際しては、作者は初めて兼家の晴姿を自分の目で見た。今、あたりの人達の「や、いで、なほ人にすぐれたまへりかし。あなあたらし」などという賛嘆を浴びながら通り過ぎていく兼家の姿の中に、公的なめざましさと、その賛辞を「聞くにも、いとどものみすべなし」と作者に思わせる私的な遊離性ととの二面がはつきりと浮び上がってくるのである。

下巻天禄三年正月兼家は権大納言となるが、続いて、二月一日、雨がのどかに降る朝、いつもより少しのんびりして作者邸を去っていく兼家の描写には、今迄とは全く異質の、客観的で突き放したものが感じられる。「なよやかなる直衣、しをれよいほどなる搔練の袿一襲垂れながら、帯ゆるやかにて、(中略)のどかに歩み出でて見まはして、『前裁をらうがはしく焼きためるかな』など」と言いながら去って行く、大納言、大将として、いよいよ貫禄のついた兼家の姿が描かれているのである。一人の男盛りの貴人、またその前に太刀を持って片膝つく道綱、夫と子供でありながら、まるで物語の登場人物のような書きぶりである。作者の感情語はわずかに「ねたげにぞ聞こゆる」の一語である。感情表現が少なくなったということは、それだけ作者の立場が物語の語り手に近くなったということでもあり、感情表現を補うものとして、兼家の言動の客観的描写があり、その効果を強めるものとして、「あかつきがた」に「いと荒く聞え」た「松吹く風の音」、あるいは兼家の去った後の「昼つかた、かへしうち吹きて晴るる顔の空」など、一言で言うならば、「安らぎ」と「孤独」という、対照的感情を移入された背景の自然

があるわけである。

このように客観化された兼家像は、二月九日の段、二十八日の段、翌年二月三日の段、と続くにつれ、ますます客観度を深めてゆくが、これは作者が自身の容色の衰えを嘆くのと対照的になっているのである。

三月二十七日の八幡祭の記事では、

つれづれなるをとて、忍びやかに立てれば、ことはなやかにて、いみじう追ひちらす者来。たれならむと見れば、御前どもの中に、例見ゆる人などあり。さなりけりと思ひて見るにも、ましてわが身いとほしきこちす。

と、だれか他の人を描くような、よりははっきりとした物語的筆致が見られる。この段に地の文で唯一の兼家に対する敬語、「御文」が使われているのも、「全集」では、「客観的物語的筆致とかかわりがあるう」としている。この段の特徴は、今迄の記事が兼家の晴姿の客観的描写に、わが身のものかさを対照させることに主眼を置き、感情を移入した自然描写で締め括るといふものだったのに対し、ここでも、「忍びやかに立てれば」「ことはなやかにて、いみじう追ひちらす」「ましてわが身いとほしき」と、対照させてはいるが、それ以上に、兼家が作者の車を見つけて、「ふと扇をさし隠して渡」ったということ、その後で、『昨日はいとまばゆくて渡りたまひにき』と語るは、などかは。さはせでもありけむ、若々しう」という作者の文に対して「老ひの恥づかしさにこそありけむ。まばゆきさまに見なしけむ人こそ憎けれ」という返り事があったという、事件そのものに対する興味にひかれてまとめられているということである。だからおのずと、冒頭のような、物語的筆致となった

のであろう。

実質的には最後の場面となる、下巻天延二年十一月二十三日、賀茂の臨時の祭の記事でも、同様の物語的筆致が見られる。さきに出家から女車と見えたのは、取り巻いている人々から察するところ、兼家の車であった。道綱は供人を従え、上達部に言葉をかけられたりしているし、父も酒盃をさされたりして兼家のひきたてを受けている。それらを眺めやりながら作者は「おもだたしきこちす」ただその片時ばかりや、ゆく心もありけむ」という感慨をもらすのであるが、そこには、作者の人生に最も深くかかわり合った三人の人物が、それぞれあるべき姿で動いているのを、時を同じくして捉える、空間的に広い視野を持つ目がある。彼らはもはや、作者との繋りに操られて動いているのではない。作者から切り離され、祭という場面におけるそれぞれの役割を果しているのであり、ここに上巻の巻の世界とは異なった下巻の世界の人物造型があるといえる。

以上が公の兼家像であるが、これらの記事からわかるのは、下巻の特色があらわれてくる頃から客観的描写が見られるようになり、いずれも貫禄のついた、威風堂々たる高官兼家の姿を、作者のものはない身に对照させて描いているということである。

このように、「蜻蛉日記」に登場する人物は、實在の人物でありながら、主題を支えるために、ある一面だけを強調し、あとは捨象して造型されている。すなわち、作者の身の上物語として、兼家ともののはかない夫婦生活を描く、上、中巻の世界においては、作者の肉親達は、兼家に対立する作者側の人々として造型されている。頼もしげなき兼家に対して、頼もしき人父、作者の支えになり、最後まで作者の身を案じながら亡くなってしまった母、作品世界にお

ける彼らは、兼家を離れては存在意義がない。また、道綱は父母の間に立つ人としての造型されている。

ところが、主題が作者の身を離れて一般化した下巻の世界になると、これらの肉親達は主題的意味を持ち得なくなり、道綱も、「父娘対面譚」「遠度求婚譚」では脇役にすぎないが、「道綱恋愛交渉譚」では歌物語の主人公として、作者や兼家とは切り離されて造型されている。また、下巻の世界にのみ登場する重要人物として、養女と遠度とがあり、改めて述べるが、二人共、終始物語主人公としての造型がなされていると思う。

(二) 時間

「蜻蛉日記」は、上巻十五年間、中、下巻それぞれ三年間に分割されているが、これらは客観的事実的時間に拘束された便宜的なものであり、内容の切れ目は別の所にあると思う。

すなわち、中巻は安和二年一月から始まっているが、桃の節句の記事、小弓の試合の記事は、必ずしも主題に沿っていないのに対して、三月の安和の変の記事から、急に散文の記述が多くなり、主題の基調に統一される。つまり、安和の変から、作者の病氣、遺書、愛宮へ長歌を贈ったことへと続いていくのであって、まさに「蜻蛉日記」正篇である「中巻の世界」が始まるのである。

ところで下巻天延元年の作者の広幡中川への転居を、柿本獎氏は、「全注釈」の中で、「床離れ」と結びつけて考察された。この後兼家は一度も訪れず、文通や道綱を通じての交渉があっただけであった。また、転居の記事に続く、下巻天延元年冬から翌年春にかけての記事の、時間的順序の乱れについて、古賀典子氏は、「その後、

夢の通ひ路絶えて、年暮れはてぬ」において、作者は床離れによる兼家との生活の終焉を迎え、いったん「蜻蛉日記」の擱筆を意図したが、また筆を起こして書き継いだので、未整理のための混乱が生じたのだとされる。^(註10) これらの説に従って、作者の身の上物語である「中巻的世界」は、この混乱部分で終焉を迎えたのだと考えたい。「下巻的世界」は、本格的にはその後の、「遠度求婚譚」から始まると言うべきである。だが、この「遠度求婚譚」と共に物語風の「養女と兼家との父娘対面譚」がその前にあり、その対面譚の始まる前の記述に注目したい。

すなわち、下巻天禄三年二月から対面譚までの間の感慨には、「世の中あはれ」ということが集中している。二月一日の、威風堂々たる貴人兼家の客観的描写の後、荒れた庭を見て、「あはれと見えたり」、三日の夜から降っている雪を見て、「世の中いとあはれなり」九日、くつろいでいる所に急に兼家を迎え、「ただ身ぞ憂じはてられぬる」と思ったあと、春寒き年、雨の「しづかに降りくらすにしたがひて、世の中あはれげなり」そして、十七日、夢合せの段の冒頭に、「世の中あはれに心細くおぼゆるほどに」とある。このような人生観照的な感慨の集中は、他のどの部分にも見られないものであり、「中巻的世界」の到達点、いかえれば終焉を迎えつつあるということを表わしているのではないかと思われる。

作者の身の回りに向ける目というのは、急に出来上がったわけではなく、身の上物語が終焉に向いつつあるのと、並行して成熟していったのだと思われる。だから、床離れに終わる「中巻的世界」と、半ば身の上物語でもある「父娘対面譚」に始まる「下巻の世界」とは、一線で分けられるわけではなく、「遠度求婚譚」までは

二者が並行して存在する、いわば過渡期だといえるのではないだろうか。

このように、内容から考えると、主題を形成する「上巻的世界」は、冒頭から安和の交の前まで、主題に完全に密着した「中巻的世界」は、安和の交から床離れまで、主題を一般化し、身辺の素材をまとめて、新しい物語を創造する「下巻的世界」は、「養女と兼家との父娘対面譚」から、「道綱恋愛交渉譚」の結末までであると思う。(尚、本稿において、内容からの分割は、「——巻的世界」と記し、「——巻」と区別する)

さて、そのことに関連して、この作品の時間の問題を考えておきたい。

近藤一氏が「蜻蛉日記」の時間は、「昔は」「今は」「例のごと」「つねにしも」など指示内容不鮮明な時間表現の語群によってあらわされているが、それは「作者にとっては生きることと直接つながる切実な時間であった。」と述べられているように、^(註11)「蜻蛉日記」は、作者の主観的時間に支えられた作品である。主観的時間とは、作者の主観に支配された兼家と繋がる時間で、主題と不可分の関係にある。そしてこの作品は終始連続した時間の流れの中にあるが、その流れは一律ではない。その事を具体的に観察していく中で、最も重要な時間の特質として考えなければならないのは、「蜻蛉日記」に、ある一場面を形造る物としてある時間と、その場面場面をつないで動的に把握される時間とがあることである。

場面的な時間の記述のし方には、日付や時節を示したり、ある一日を基準にして「又の日」のように次々と記述したり、記事内容に沿って「心のどかに暮らす日」とするなどがある。一方、動的な時

問の記述は、宮崎狂平氏が

(歌) などといふほどに、九月になりぬ。つごもりがたに……

(歌)

等の叙述法を

時の推移、経過を叙することによって記事を時間的に構成して

いく方法

(注)

とされているもの、また、これは、記事と記事との「つなぎ」となる叙述で、素材の中から主題に沿ったものだけを選び出し、それらをこの動的な時間の記述で繋ぐことによって、全てを主題色一色に塗りつぶすことができるわけである。この動的な時間の記述方法は、主題の形象化の方法が異なる、上、中、下巻の世界それぞれによって、当然異なってくる。

まず上巻の世界についてであるが、その原資料のほとんどが贈答歌だと思われ、同じ分量で十五年間のことを述べているために、記事が粗い——一カ月間に贈答歌一組程度、あるいはそれ以下のことが多い——のを、時間的に連続させようとしているために、次のように後らの記事につなげていく記述方法が多く使われている。

(歌) などといふほどに、九月になりぬ。

この「(歌) など……するうちに何月にもなりぬ。」という形は、上巻の世界には多く見られるが、中・下巻の世界になると、ほとんど見られなくなる。

また、動的な時間の記述に、灰色のヴェールがかけられている。

はかなながら秋冬も過ぎしつ。

上巻の世界の記事内容自体には、主題にそぐわない、明るいものもあるが、このようなつなぎの記述が、基調の表現の一つとして、そ

れらを主題に組み入れる効果を持っているのである。

中巻の世界においては、動的な時間の記述、つなぎの部分が成長して、独詠歌に収束する段になっている。これについては後で述べるが、具体的場面のない、日常生活の苦悩が、次第に高まっていき、独詠歌に形象化されているのである。

また、その苦悩の日常から自己を解放するために行なわれた物語紀行は、その中で、兼家から切り離された時間の進行がなされており、異質である。

下巻の世界では、作者は広幡中川に転居し、兼家から切り離された時間を持つ。いわば、物語と同じ状態になっているのである。従って、三つの物語が含まれるが、その物語と物語との間の記事からは、主題が消失してしまっている。だから、物語の部分以外は、身辺雑記的な、日録の記事が多くなり、つなぎの記述が減ってバラバラな感じがする。

しかし、一方、作者が身近な素材を物語としてまとめようとする過程において、素材内部からの要求によって、時間の觀念からの解放が行なわれる。例えば、「父娘対面譚」は、十七日の夢合せの記事の後、過去に遡って、十二、三年前の、兼家と兼忠女との交渉から菘女迎え入れの段どりを述べ、十九日の父娘対面の記事に至るわけであり、日付としては、十七日に十九日が続くわけだが、内容としては、時間を超えて「父娘対面譚」としてまとまった形態を示している。ここに物語への接近が見られるわけである。

以上のように、「蜻蛉日記」における時間の捉え方は、それぞれの巻の世界の特質と、密接に結びついており、主題を維持するのに重要な要素となっているのである。

(三) 上巻の世界

上巻の世界の表現と構成を考えるにあたって、次に挙げる二説が非常に重要だと思つう。

一つは、上村悦子氏が、作者は主題に沿つて素材を整理、取捨選択し、上巻に再構成した。即ち、はかなさを強調するため幸福な記事を省略又はごく簡潔にし、苦惱深い思出を詳細に描写する。また、幸福な記事の終末にはかない悲しい気持を表わした文句を挿入する、といった操作が行なわれていると述べられているものである。

もう一つは、伊牟田経久氏が、「序と結びの間に、主要素材を中心としてまとめられた部分八つがおかれ、これらが一つの基調によつてつなぎ合わされた構成になっている」と述べているものである。

全く同感であるが、長歌の贈答までは「町小路女事件」として一つの部分と考え、全体を七つの部分に分けたい。そしてそれらには明るい部分、暗い部分、晴の部分の三種があり、それらが絡み合わされた構成となっているが、暗い基調で繋ぎ合わされている上に、暗い部分の印象が強いために、全体として統一された主題が感じられるのだと思われる。

まず暗い部分として、結婚二カ月後の偷寧離京という第一の山場がある。それについては、人物造型の父の所で述べたが、この時点における兼家は不誠実ではなく、作者が不安に思ふ必然的な理由は何一つみつからないのに、「人の心もいとたのもしげには見えぬむありける」と灰色の言葉で規定されている。この断層が第一の特

徴であり、他にもいくつかの特徴が見られる。

それは第二に、近接同語を初め、激しい口調の表現が多く、この局面的な生々しさが、「ものほかなし」という、全篇を通じて基調となる表現と、断層を感じさせつつ同居しているということである。

第三に、偷寧と兼家との贈答歌はあるが、これはどの悲嘆に沈んだにもかかわらず、作者の歌がない。ということは、この記事に至る迄の、歌物語的な記事の進行と、著しく趣を異にした、散文中心の場面であるということである。これはつまり、執筆時における、作者の補筆が多く、その心境が多く影を落としているのではないかということである。なぜなら、上巻の原資料を考える時、おそらく初度の初瀬詣あたりまで、散文の詳しいメモはなく、それまでは、その時々々に詠まれた歌と、その状況を詞書的に、簡単に記したメモがあった程度ではなかつたかと思われるからである。だから、この場面には、「ゆく人もせきあへぬまであり、とまる人はたまひていふかたなく悲しきに」等、対句表現がいくつも見られるのだと思われる。

また、第四は、書き出しが、「(歌)とあるほどに、わがたのもしき人、陸奥国へ出で立ちぬ」とあり、動的な時間の流れが示唆され、それを受けて、この場面が転回し、また、「かくて、日の経るままに」以下、次の山場へ向つていくことである。

次に町小路女の事件がある。これは上巻の世界における兼家の唯一の不行跡であるのに、読者はこの事件の鮮烈な印象によつて、まづ上巻の世界全体のイメージを作り上げてしまふのである。

その事件の最後の町小路女零落の段を見よう。兼家は町小路女を捨てて、

…ここには例のほどにぞ通ふめれば、ともすれば心づきなうのみ思ふ…

と作者は言う。これは作者にとって満足のいく状態ではなかったと察せられるが、事実としては、町小路女が出現する以前の状態であり、出現後も、「かくありきつつ、絶えずは来」る状態であったことを考え合わせると、かなり頻繁な訪れであったと推測され、これも灰色の言葉の一つと考えられよう。また、この山場は作者の妻まじいまでの赤裸々な嫉妬心を示したものとして有名である。しかし、「いまぞ」「…ものか」「胸あきたる」等の激しい表現が、作者の嫉妬心を激しく表現しているという点に注目するのではなく、倫寧離京、母の死等の山場の激しい悲嘆の表現と同質の、この場合はたまたま嫉妬心という形で表出した、激しい口調という特徴だと考えたい。また、散文中心で和歌がなく、「かやうなるほどに」という動的な時間の記述が続いていて、ここにも倫寧離京の段と同じ特徴がうかがえる。

更に、「町小路女事件」全体の特徴としてまとめよう。

第一に、兼家が客観的には誠実と思われる態度をとっていても、それを打消し、覆ってしまう灰色の言葉が見られる。あるいは、それに準ずるものとして、兼家の誠実と見られる行動を記述しない。

第二に、激しい口調が見られる。近接同語を初め、「…ものか」「あさまし」「死」「目くるる」「いまぞ胸はあきたる」等、苦悩のさまが生々しく伝わってくる。上村氏が、これらの言葉を、記事に信憑性を与え、主題の徹底、強調を計る補強策とされているのに従い、(前掲論文)執筆時になされた文学的操作であると考えたい。

第三に、町小路女の出産の段、零落の段など、山場が、筋の進行

上重要な位置にありながら歌を含まないのは、かなり異質である。歌数の多い上巻的世界においては、贈答歌をつなげただけで成立している段、歌を核に、それを補う説明的な散文が付け加えられて成立している段が多いのである。

第四の時間の問題については、動的な時間が山場自体の時間に流れ込んで、頂点となる場面を造り出しているということが言えると思う。

第五に、この事件が一応落着いた時点で二首の長歌が置かれているが、これらを天禄三年から応和元年にわたる記事の空白を埋めるための後年の作者の創作ではないかとされた西原和夫氏の説に従い、また、「注解13」はこの長歌の内容を段落に区切ってはっきり捉えると、日記のここまでの記事が要約して詠み上げられており、後年の部分とも深いつながりがあるとしているが、この二つの長歌にこの「町小路女事件」の中のいくつかの中心場面、すなわち、まず、天曆八年夏の結婚、十月の倫寧離京、天曆九年十月「なげきつつ」の贈答場面、天徳元年秋野分の日、町小路女零落、道綱の兼家の詞を「まねびありく」さまとといった山場がとられているということである。

これら五つの特徴から、執筆時に原資料にどのような文学的操作が加えられて主題が形成されたかということが推測できる。作者の手元にあった原資料とは、おそらく文や歌反古、簡単な詞書程度の散文のメモといったものであるが、それらを時間の経過に沿ってただ羅列したところで主題は形成されない。それには、いくつかの、主題を明確にするための山場を作る必要があった。「町小路女事件」を執筆するにあたって、導入として倫寧離京の場面、「なげ

きつつ」の贈答場面、町小路女の出産、零落という山場を想定し、散文の力を駆使して書き上げたのではないだろうか。これらの山場においては、特に兼家の誠実な振舞いに対しては、書かないか灰色の言葉をつけ加える。また激しい表現をすることによって信憑性を持たせる。時間の連続したものにするために、山場と山場との間には歌を中心とした段を配し、それらを動的な時間の記述でつなぐことによって、間の日々も主題色に塗りつぶして、全体の流れとして山場に向かうようにする。また長歌は、作者のものも兼家のものも、執筆時における作者の創作と考えたい。なぜなら、例えば、偷寧離京のくだりが、頼もしげなき兼家に対して頼もしき父が作者から離れていくと描かれているのは、その当時の意識からではなく、少なくともある程度の構想を持った執筆時の、意識的な文学的操作によるものと考えられるからである。西原氏の言われるように、資料不足を補う意味と同時に、ここでもう一度山場を繰り返すことによって、その効果を強めたのではないかと思われるのである。この効果によって、「町小路女事件」は読者の心に強く印象づけられ、上巻的世界の主題形成の原動力となっているのだと思われる。

続く暗い部分「母の死」については人物造型の所で触れたが、ここにも、同様な四つの特徴が見られるので、執筆時の文学的操作も同じように考えられる。

次の暗い部分、康保三年の「はかなき身」の記述から泔坏の一件、稲荷・賀茂参詣へと続く記事について考えたい。

かくて、人憎からぬさまにて、十といひて一つ二つの年はあまりにけり。されど明け暮れ、世の中の人のやうならぬを嘆きつつ、つきせず過ぐすなりけり。それもことわり、身のあるやう

は、夜とて、人の見えおこたる時は、人少なに心細う、いまはひとり頼むたのもし人は、この十余年のほど、あがたありきにのみあり、たまさかに京なるほども、四五条のほどなりければ、われは左近の馬場をかたきしにしたれば、いとほるかなり。かかるところをも、とりつくるひかかはる人もなければ、いと悪しくのみなりゆく。これをつれなく出で入りするは、ことに心細う思ふらむなど、深く思ひよらぬなめりなど、ちぐさに思ひみだる。ことしげしといふは、なにか、この荒れたる宿の蓬よりもしげなりと、思ひながむるに、八月ばかりになりけり。

兼家が病氣になり、作者が本邸まで赴いて愛情を確かめてから、四月の賀茂祭の記事、端午の節会の記事が続いた後、この段が続くのだが、この段は、これといった場面を描いているのではなく、五月の節会から八月までをつないでいるが、十一、二年の結婚生活を総括的に述べたものである。

作者が明け暮れ不幸を嘆きつつ、尽せぬ物思いをし続けて暮らしているのは、心細い有様で暮らしており、家も、修理し世話してくれる人がいないこと、その荒れていく家に平気で出入りする兼家の無神経さが原因であるという。「いまひとりを頼むたのもし人」と、偷寧が兼家と対立的に描かれている所に、偷寧の頼もしき人としての造型が確認できる。

「人憎からぬさま」は、さまざまな解釈があるが、兼家の病の記事や、なごやかな端午の節会の記事を書いてきた作者が、ここで主題を立て直そうと、執筆時に挿入した段と考えて「全集」の「一見なじみ合っている夫婦」ととりたたい。

ここで、このように、統括的な主題に即した叙述がされたあと、それを受けて沓坏の水の段があり、九月、「かうものはかなき身の上も申さむ」と、稲荷と賀茂に詣でて、七首の和歌を奉納したことが語られる。そして、「秋果てて、冬はついたちつごもりとて、あしきもよきも騒ぐめるものなれば、独り寝のやうにて過ぐしつ」と、灰色の言葉で、年末年始のことが主題色一色に塗りつぶされるのである。

これらの「はかなき身」の記事のうち、沓坏の水の段以外は、兼家とのものはかない夫婦生活の具体的な場面を描いたものではない。沓坏の水の段にしても、「われはいまは来じとす」と言われて、「おどろおどろしう泣く」道綱の姿、水面にはこりが浮いている沓坏の水と、鮮烈な物を効果的に配して独詠歌にもっていくという手法が、優れて印象的のために、非常にものはかない感じがするが、実情は言い争いをした結果、五、六日音沙汰がなかったというだけである。

結局この三段は、執筆時にまとめられることによって暗い部分で形成しているのであって、兼家の病気によって愛情が回復した明るい部分と、登子との交歓を記す晴の部分との間にあって、主題を立て直しているのである。この位置にこの暗い部分があることによって、上巻の世界における主題の形成の骨組がなされたと言つてよいと思う。

また、上巻を挟んでいる序跋も、主題の形成の仕上げをしているのであり、上村氏の説（前掲論文）に同感である。

次に明るい部分を考えてみたい。まず康保三年三月の「兼家病む」であるが、この部分は、作品中ほとんど唯一といつてよいほど

作者と兼家との愛情が高まり、融合しているので、直ちに主題は形象化されていない。兼家が死ぬかもしれないという主題を超えた危機に、当時の感情が生のまま描かれたのだと思われるが、健康の回復と共に、「例のほどに通ふ」という日常生活に戻ってしまったのである。

次に安和元年九月の「初瀬詣」がある。これは最初の物語紀行であり、ここで初めて本格的な自然描写が見られるのである。ものはない夫婦生活という主題は、一言で言えば、作者の心と兼家の心とが噛み合わないことを描くことによって形象化されているわけである。兼家の周囲が次第に華やかになっていくにつれ、ますます二人の間は隔っていき、作者の心は疎外されてしまう。そうした中で自然が新しく発見されるのである。作者は「あはれ」「をかし」を頻繁に使用しており、これは作者にとつて、この自然の発見がいかに感動的であったかを物語っていると思う。それは作者が、知識として持っていた類型的観念の自然美ではなく、直接触れることによって生の感動が伝わってくるものであったのではないだろうか。

やがて兼家からの使いが、誠意のこもった手紙を持ってくる。一夜明けて、帰路はあちらこちらで響応を受けて、賑やかな旅だった。その日は山城の三宅という所に泊り、翌朝まだ暗いうちから出立すると、宇治川の向う岸にまで兼家は迎えに来ていた。日射しが僅かに洩れ始め、宇治川の川霧があちらこちら晴れていき、向う岸に家の子を引き連れて、旅先らしい狩衣姿の兼家が絵画的に捉えられる。川の向うに所領のある按察使大納言から、紅葉につけた雉や水魚が次々に届けられる。「いみじかりつものかな。御車の月の輪のほどに日のあたりて見えつるは。」「近う花咲き実なるまでなり

にける日ごろよ」という追従も、追従に感じられないほど最も華やかな場面である。この明るさには灰色のヴェールはかけられていない。これは、兼家夫人としての最高の思い出であると共に、それだけに中巻的世界の物語の苦惱を一層極大させているのである。

この二つの明るい部分は作者の人生の中でもかなり特異で重要なでき事であったので、主題に沿わなくても当時の心境そのままに描かれたのだと思う。しかし、この明るさを消し主題の基調にはめこむために、「兼家病む」には「はかなき身」が、「初瀬詣」には跋文が続いているのだと思われる。

最後に晴の部分を考えてみたい。長歌の贈答のあと、一転して「章明親王との交歓」となる。兼家と親王との和歌の詠み合いにおいて、親王の歌を「もろともに見る」と書かれているように、兼家の側には当然作者が協力しており、風流貴公子という名の高い親王との交歓は、兼家との甘美な思い出の一齣であったのだろう。この部分には、終始高貴な人を相手に、作者の歌才が十分に生かされる晴れがましさと、兼家が作者のもとに留まっていた、一緒に交際するという幸福とが溢れている。ほとんど原資料のままであり、執筆時の心境は反映していないと思われるが、一カ所だけ、反映しているのではないかと考えられる所がある。

「長雨」にかかわる歌の贈答の段で、作者は忘たがへのために父の家におり、親王は垣根を隔てたすぐ隣にいらした。父の家は粗末なので、雨漏りがして濡れるなどと騒いでいると、親王が「かくのたまへるぞ、いとものぐるほしき」この「ものぐるほしき」は、「雨漏りで騒ぐのを聞付けられて恥づかしい」「大系」はめをはずしすぎて「常識はずれだ、とんでもない」「全注釈」というように、

親王の歌に対する言葉とだけ解すると、宙に浮いてしまう。「注解(注18)」「全集」は、兼家と共に親王と和歌を媒介として遊戯的な交際をしたことが忘れ難いものの、それがあまりにも作者の内面と隔たった風流事ではなかったという認識を表現したとする。

兼家を媒介にして上流社会に触れた、歌才を十分に発揮し、遊戯的享樂的雰囲気浸ったこの一時は、歌物語の世界さながらの、現実とはかけ離れたものであったことだろう。執筆時の作者は、その戯れの楽しさに同調した当時を否定せずなつかしく想起しているというものの、兼家に繋って生きるが故の苦惱を味わい尽した今となっては、「いとものぐるほしき」の一言をはさまずにはいられなかったのではなからうか。

次に、愆子にかりのこを奉った段をも含めて、「貞観殿登子との交歓」があるが、ほぼ和歌を媒介とした遊戯的な交渉と理解することができる。(以下次号)

注1、『王朝女流文学の世界』UP選書

2、『かげろふ日記』上巻の表現と構成』『言語と文芸』昭40・5

3、『蜻蛉日記』日本古典文学全集 木村正中、伊牟田経久、小学館、以下「全集」と略す。

4、『蜻蛉日記全注釈上・下』柿本奨 角川、以下「全注釈」と略す。

5、『蜻蛉日記注解』秋山虔・上村悦子・木村正中『解釈と鑑賞』昭45・7 以下「注解」と略す。

6、『解釈と鑑賞』昭38・12

- 7、『解釈と鑑賞』昭40・4
- 8、『解釈と鑑賞』昭39・7
- 9、『かげろふ日記』日本古典文学大系 川口久雄、岩波、以下「大系」と略す。
- 10、「蜻蛉日記下巻の問題点に就いて——天延元年冬の記事を中心に——」『国語と国文学』昭47・6
- 11、「日記文学に於ける時間の問題——蜻蛉日記を中心に——」『国語国文学報』第十五集、昭37・5
- 12、「女流日記文学における叙述法の一特性」『国語と国文学』昭42・5
- 13、「蜻蛉日記執筆をめぐって——上巻の構成・表現の面より——」『国文目白』第五号 昭40・10
- 14、前掲論文
- 15、木村正中先生が、「蜻蛉日記本文批判の方法」『国語と国文学』昭34・3で指摘されている特徴
- 16、「蜻蛉日記覚書——その長歌をめぐる一試論——」『日本文学史研究』七、昭25・10
- 17、『解釈と鑑賞』昭38・5
- 18、『解釈と鑑賞』昭38・8